

登場人物

子供の狐（子狐）

母さん狐（母狐）

帽子屋

人間の母親（母親）

人間の坊や（坊や）

◆冬。子狐が初めての雪にはしゃぎ、手が冷たいと母狐に訴える。
◆ナレーター、子狐、母狐

寒い冬が 北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。
或朝 洞穴から子供の狐が 出ようとしてしまいましたが、

子狐 「あっ」

と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。

子狐 「母ちゃん、眼に何か刺さった、ぬいて頂戴早く早く」

と言いました。

母さん狐が びっくりして、あわてふためきながら、
眼を抑えている子供の手を恐る恐るとりのけて見ましたが、
何も刺さってはいませんでした。母さん狐は 洞穴の入口から
外へ出て始めてわけが解りました。昨夜のうちに、
真白な雪がどっさり降ったのです。その雪の上からお陽さまが
キラキラと照していたので、雪は 眩しいほど反射していたのです。
雪を知らなかった子供の狐は、あまり強い反射をうけたので、
眼に何か刺さったと思ったのでした。

子供の狐は 遊びに行きました。真綿のように柔かい雪の上を
駈け廻ると、雪の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹が
すっと映るのです。

すると突然、うしろで、

「どたどた、ぎーっ」と物凄い音がして、パン粉のような粉雪が、
ふわーっと子狐におっかぶさって来ました。子狐は びっくりして、
雪の中にころがるようにして 十米も向こうへ逃げました。

何なんだろうと思おもってふり返かえって見みましたが何なにもいませんでした。それは縦もみの枝えだから雪ゆきがなだれ落おちたのでした。まだ枝えだと枝えだの間あいだから白しろい絹糸きぬいとのように雪ゆきがこぼれていました。

間まもなく洞穴ほらあなへ帰かえって来きた子狐こぎつねは、

子狐かあ「お母ちゃん、お手て々が冷つめたい、お手て々がちんちんする」

と言いって、濡ぬれて牡丹色ぼたんいろになった両手りょうてを母さん狐かあぎつねの前にさしだしました。母さん狐かあぎつねは、その手てに、はーっと思いきをふっかけて、ぬくとい母さんかあの手てでやんわり包つつんでやりながら、

母狐かあ「もうすぐ暖あたたかくなるよ、雪ゆきをさわると、すぐ暖あたたかく

なるもんだよ」

といいましたが、かあいい坊ぼうやの手てに霜焼しもやけができてはかわいそうだから、夜よるになったら、町まちまで行いって、坊ぼうやのお手て々にあうような毛糸けいとの手袋てぶくろを買かってやろうと思おもいました。

◆夜。母狐が子狐を町に送り出す。
◆ナレーター、子狐、母狐

暗い暗い夜が 風呂敷のような影をひろげて 野原や森を
包みにやって来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも
白く浮びあがっていました。

親子の銀狐は 洞穴から出ました。子供の方は お母さんの
お腹の下へはいりこんで、そこからまんまるな眼を
ぱちぱちさせながら、あっちやこっちを見ながら歩いて行きました。

やがて、行手にぽつりあかりが一つ見え始めました。それを
子供の狐が見つけて、

子狐 「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも
落ちてるのねえ」

とききました。

母狐 「あれはお星さまじゃないのよ」
と言って、その時母さん狐の足はすくんでしまいました。

母狐 「あれは町の灯なんだよ」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と
出かけて行って、とんだめにあったことを 思出しました。
およしなさいっていうのもきかないで、お友達の狐が、
或る家の家鴨を盗もうとしたので、お百姓に見つかって、
さんぎ追いまくられて、命から逃げたことでした。

子狐 「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」

と子供の狐が お腹の下から言うのですが、母さん狐は

どうしても足がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

母狐 「坊やお手々を片方お出し」

とお母さん狐がいました。その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、可愛い人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたり握ったり、抓って見たり、嗅いで見たりしました。

子狐 「何だか変だな母ちゃん、これなあに？」

と言って、雪あかりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

母狐 「それは人間の手のよ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさん人間の家のあるからね、まず表に円いシャッポの看板のかかっている家を探すんだよ。それが見つかったらね、トントンと戸を叩いて、今晚はって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあけるからね、その戸の隙間から、こっちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちょうどいい手袋頂戴って言うんだよ、わかったね、決して、こっちのお手々を出しちゃ駄目よ」

と母さん狐は言いかけました。

子狐 「どうして？」

と坊やの狐はききかえました。

母狐 「人間はね、相手が狐だと解ると、手袋を売ってくれないんだよ、それどころか、掴まえて檻の中へ

入れちゃうんだよ、人間にんげんってほんとに恐こわいものなんだよ」

子狐 「ふーん」

母狐 「決して、こっちの手てを出だしちやいけないよ、こっちの方ほう、

ほら人間にんげんの手ての方ほうをさしだすんだよ」

と言いって、母かあさんの狐きつねは、持もって来きた二ふたつの白銅貨はくどうかを、

人間にんげんの手ての方ほうへ握にぎらせてやりました。

三場

◆子狐が帽子屋で手袋を買う。 ◆ナレーター、子狐、帽子屋

子供こどもの狐きつねは、町まちの灯ひを目めあてに、雪ゆきあかりの野原のほらを よちよちやって行いきました。始はじめのうちは 一ひとつきりだった灯あかりが二ふたつになり三みつつになり、はては 十とおにもふえました。狐きつねの子供こどもは それを見みて、灯あかりには、星ほしと同じおなように、赤あかいのや黄きいろいのや青あおいのがあるんだなと思おもいました。やがて町まちにはいりましたが通とおりの家々いえいえはもうみんな戸とを閉しめてしまつて、高たかい窓まどから暖あたたかそうな光ひかりが、道みちの雪ゆきの上うえに落おちているばかりでした。

けれど表おもての看板かんばんの上うえには大たいてい小ちいさな電燈でんとうがともっていましたので、狐きつねの子こは、それを見みながら、帽ぼう子屋しやを探さがして行いきました。自じ転車てんしやの看かん板ばんや、眼め鏡がねの看かん板ばんやその他ほかいろんな看かん板ばんが、あるものは、新あたらしいペンキで画かかれ、或あるものは、古ふるい壁かべのようにはげていましたが、町まちに始はじめて出でて来きた子狐こぎつねには それらのものがいいったい何なんであるか 分わからないのでした。とうとう帽ぼう子屋しやが みつかりました。お母かあさんが道々みちみちよく教おしえてくれた、黒くろい大おおきなシルクハットの帽ぼう子しの看かん板ばんが、青あおい電燈でんとうに照てらされてかかっていました。子狐こぎつねは 教おしえられた通とおり、トントンと戸とを叩たたきました。

子狐 「今晚こんばんは」

すると、中なかでは 何なにかこと音おとがしていました。やがて、戸とが一いっ寸すんほどゴロリとあいて、光ひかりの帯おびが 道みちの白しろい雪ゆきの上うえに長ながく伸のびました。

子狐 は その 光 がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、——お母さまが出しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

子狐 「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

すると帽子屋さんには、おやおやおやと思いました。狐の手です。

狐の手が 手袋をくれと言うのです。これは きっと木の葉で 買いに来たんだなと思いました。そこで、

帽子屋 「先にお金を下さい」

と言いました。子狐は すなおに、握って来た白銅貨を二つ 帽子屋さんへ渡しました。帽子屋さんは それを人差指のさきにつけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは 木の葉じゃない、ほんのお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て 子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を 帰り始めました。

子狐 「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰有ったが

ちっとも恐ろしくないや。だって僕の手を見ても

どうもしなかつたもの」

とおもいました。けれど子狐は いったい人間なんて どんなものか 見たいと思いました。

四場

◆帰り道。子狐が窓越しに、人間の母子のやりとりを聞く。
◆ナレーター、子狐、母狐、母親、坊や

ある窓の下を通りかかると、人間の声がしていました。
何というやさしい、何という美しい、何と言うおっとりした
声なんでしょう。

母親 「ねむれ ねむれ

母の胸に、

ねむれ ねむれ

母の手に――」

子狐はその唄声は、きつと人間のお母さんの声にちがいない
と思いました。だって、子狐が眠る時にも、やっぱり母さん狐は、
あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、子供の声がありました。

坊や 「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は 寒い寒いつて

啼いてるでしょうね」

すると母さんの声が、

母親 「森の子狐も お母さん狐のお唄をきいて、洞穴の中で
眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早く
ねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早く
ねんねするか、きつと坊やの方が早くねんねしますよ」

それをきくと子狐は 急にお母さんが恋しくなって、
お母さん狐の待っている方へ 跳んで行きました。

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰って来るのを、

今か今かとふるえながら待っていましたので、坊やが来ると、暖い胸に抱きしめて泣きたいほどよろこびました。

二匹の狐は森の方へ帰って行きました。月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影がたまりました。

子狐 「母ちゃん、人間ってちっとも恐くないや」

母狐 「どうして？」

子狐 「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。

でも帽子屋さん、掴まえやしなかったもの。ちゃんとこない暖い手袋くれたもの」

と言って手袋のはまった両手をパンパンやって見せました。

お母さん狐は、

母狐 「まあ！」

とあきれましたが、

母狐 「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」

とつぶやきました。

〈完〉

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 新美南吉 『手袋を買いに』 Podcast 版

発行日 令和 3 年 5 月 16 日

著 者 新美南吉

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『新美南吉童話集』岩波書店 1996（平成 8）年

初 出 1943（昭和 18）年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000121/card637.html>

